
ダッチワイフ

信親

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダッチワイフ

【Nコード】
N32810

【作者名】
信親

【あらすじ】
 挨拶しか交わさぬ二人。
 情事しか交わさぬ二人。
 男の求めたものはどちらなのか。

（前書き）

私はよく「本当に自分のこと好きか」と付き合った異性に問われます。

私は好きです。

でもそれは伝わらなければ意味がない。私が間違っていた。好きです。

いつかそう言って、不安ながらも私を愛してくれたあの人へ。

あれからどれだけ時間が経ったろう。

情事に明け暮れ、愛に溺れたあの頃を懐かしむこともなく、嘆くこともなく、ただ、日に日に増えていくゴミの山を見つめている。あの瞳は本物か偽物か、僕にはもうわからない。確かなのは、”あれ”が本物だったということだけ。世に言う廃人と化した僕の中で、それだけが唯一無二の真実で、現実だったんだ。

朝目覚めるとおはよう、と声をかけ、仕事に向かう僕を玄関まできいて送る。

「いつてらっしゃい。」

行ってきます、と、何年言葉にしていなかったろう。彼女はそんな僕にも欠かさず挨拶をするのだった。

前は彼女を慈しみ、愛し、大事にしていたような気もする。しかしそれは家に女がいるという新鮮なシチュエーションに酔いしれていたんだ。

5年の月日を共にしたなら慣れや飽きも当たり前だろう。むしろ、彼女が家にいることが当たり前にもなる。ぼんやりと彼女を受け入れ、彼女と過ごし、彼女と眠る。それが僕の日常となっていたんだ。

でも、変化は思いがけずに訪れた。僕はここぞとばかりにそれに食いついた。こんなに人を愛することなど二度とない、そう思ったから。

百合は、彼女とはまるで正反対の女だ。派手な見た目、強気な態度、それでいて繊細。人生観やセックスも情熱的だ。

毎週金曜、夜11時に決まったホテルで会っていた。

百合は言った。

「人は本当に誰かを愛すると死にたくなるほど胸が苦しくなる。眠れなくなる。そして、自分の物にたくなる。どんな形であれ、どんな手を使っても。」

最初はよくわからなかったが、百合と一緒にいるうちに言葉の意味を理解した。胸が苦しい。百合が愛しい。僕と会わない時間は何をしているのか気になる。悩み悩んで、死にたいくらいだ。

百合と会って、求め求められ、それに安堵してホテルを出る。そしてまた会うまでの一週間、頭を抱えて過ごす。百合が言っていたのはこれだ。僕は理解できた。そう思った瞬間に、百合と本当に愛し合えたのだと自負していた。

そこで決意は固まったんだ。彼女を家から出そう。そして、百合と新しい日々を過ごすんだ。百合となら、何年一緒にいても飽くことのない輝いた毎日が過ごせる。そう思っていた。

「おかえりなさい。」

いざ、彼女を捨てるとなると決意が揺らぐ。僕の弱さだ。いつものように僕を出迎え、夕食を出し、何も言わずに家事をこなす彼女。

何も、言わない。当たり前か。ダッチワイフだから。僕の中で悪い考えが過ぎり、戻ってきて身体を乗っ取った。

もう、捨てるんだ。最後に役割を果たしてもらうのも悪くない。

僕は箆笥を整理している彼女の腕を掴み、ベッドへと纏れ込んだ。華奢で、小さな身体。何をされようとなされるがままの彼女。何も言わない。求めない。ただただ僕の欲望を受け入れる。

違う。僕が求めていたのはこんなのじゃない。百合のように熱い、互いが互いの快感を突き詰め合う。そんな愛し合わなくてはできないセックスがしたい。こいつじゃ、人形じゃできない。

僕は取り留めようもない苛立ちを抑えることができず、彼女を殴っていた。

何も言わない。何で、何も言わないんだよ。

しかし、彼女は静かに涙を流していた。それに気付いた頃には、僕は彼女の中で汚い欲望をぶちまけていたわけだが。涙に触れるわけでもなく、僕はそのまま寝た。彼女が肩を震わす小さな振動がベッドを伝う。

それでも、何も感じなかった。役目は果たした。明日にでも捨ててやる。そして、百合と…

百合との愛に満ちた明日を夢見て、僕は眠った。丸裸で横たわる彼女の隣で。

「僕と結婚してくれ、」

情事を終えてシャワーを浴びる百合に僕は言った。堪えきれなか

った気持ちを戸惑うことなく一気に言葉にした。愛しい気持ちが溢れて、限界だった。そんな僕を百合はちらつと見てすぐまたシャワーへと向き直り、その妖艶な身体に雫を浴びせる。

「結婚？」

「そうだ、すぐにも僕と一緒に暮らそう。」

百合は手荒にシャワーを止め、こちらを見て鼻で笑った。そんな厭味な笑顔さえ、僕には慈愛に満ちたものに見えた。しかし、それは前者なのだと百合の言葉でしらしめられる。

「…冗談言わないで。無理。」

「無理じゃない。僕達は今までこんなにも愛し合ってきた。結婚したらもつと…」

「愛し合ってきた？してきたのはセックスだけじゃない！」

そう言い放って百合はバスローブを羽織った。そしてベッドにどっかりと座り、退屈そうに溜息をつく。僕は百合の隣に座り、彼女の手をとった。

「絶対幸せにする。」

「…無理。」

「愛してるんだ、百合！」

「…しつこい！」

百合は突然、ホテルの内線を取りどこかに電話をかけ始めた。

「トラブル。ちょっと来て。」

百合が電話を切り、何が起こったかよくわからないままに知らない男達が入室してきた。

「誰だ、君達は。」

僕の声など聞こえていないかのように百合と男達が話をしていた。すると、男の一人がこちらに来て、言った。

「結婚とは、どういうことですか？」

「…は？」

「百合を買い取って頂くということでしょうか。」

意味がわからない。百合は嫌だ嫌だと喚くばかりで、男達とはというと僕の返事を待ってただじっと見つめてくるばかり。見かねた一人が話し始めた。

「当社ではレンタルしていただいていたダッチワイフをそのまま買い取っていただくこともできますが…どうなさいますか？」

ダッチワイフ。百合が。

それを聞いた瞬間、僕の中で築かれていた愛の概念、理想……いろんなものが崩れ落ちた。

「…帰ります。」

僕は財布から3万抜き取り、その場にハラハラと落とした。ありがとうございます、と、男の声があった気がするけど、僕はフラフラと振り返ることなくホテルを出た。それが、百合との最後。あんなにも愛し、焦がれた女性には僕を拒絶し、追ってくることもなかった。夢から覚めてとぼとぼと家路を歩む。しかし、なかなか上手く歩けなかった。足に力が入らず、思うように進めない。これは失恋なのか、現実を突きつけられたのか、どちらなのかよくわからなかったが、おそらく両方なのだろう。足には力が入らないのに胸元だけは何故か熱かった。痛かった。

家を目前にしてさらに現実を思い知る。百合に結婚しようと迫ったが、家にはまだ彼女がいる。いつしか彼女は僕の目にも映っていなかった。毎日彼女の作る朝餉を食べていたというのに。物悲しいのと共に、おかしくなってきた。眉間には皺が寄るのに、自然と口元は笑っていた。

ダッチワイフは百合だった。最初からわかっていたのに。僕はただ、狂ってしまうほどの恋がしたかったんだ。彼女と過ごす、なんの刺激もない緩やかな毎日には飽き飽きしていたんだ。これからはまたあの彼女と二人暮らしか、と少し肩を落としながらもどこか安堵していた。まだ、彼女がいると。彼女はダッチワイフではない、本当の温もりを持った人間だ。僕は百合という夢から覚めて、彼女という現実によつと目を向けた。都合がいいにも程がある。しかし、許してもらえらると思っていたんだ。彼女は何があっても当たり前のようにそこにいたから。

僕はゴミの山から一冊のアルバムを取り出した。付き合い始めた頃、彼女と行った旅行写真。笑いあう二人。知らない人に撮ってくださいと頼んだ時は緊張した。そんな僕を見てクスクスと彼女に笑われたのも覚えている。

百合と別れたあの晩、彼女は荷物をまとめて家を出ていた。書置きはなかったが、筆筭にしまわれていたアルバムが残されていた。そして、誰もいなくなった寝室で見つけたのが見覚えのない包装された一つの箱。開くとそこには部屋の色に合わせたフォトフレームがあった。それを見て、僕はやっと思い出した。彼女を殴り、抱いたあの日は僕と彼女の記念日だった。あの時筆筭をまさぐる彼女は何をしようとしていたのだろうか。このフォトフレームを手に、どの写真を収めるかを話したかったのか。もしくは、これに入れる写真はどこで撮ろうかを話したかったのか。どちらにせよ、彼女は僕と、またあの頃に戻ろうとしていたんだ。当たり前の毎日に鬱蒼とし、ろくに話もしなくなった僕と。夢から覚めても涙はでなかったのに、この時ばかりは嗚咽しながら惨めたらしく泣いた。

それから、彼女を取り戻そうとダッチワイフを買ってはみたが、気に入らない。殴れば泣くし、壊れる。なにより、僕の家にいることが当たり前でない。そんな人形のゴミが僕の家には山となって積み重なっている。血の気のない瞳がこちらを見つめるが、何も感じない。

僕の愛とはなんだったのか。情熱か、平穏か。どちらもなくなった今、彼女が現実だと気付いたまではよかったがそれまでもが夢と化した。

僕の愛とはなんだったのか。愛とはなんなのか。

こんなゴミ屋敷のような僕の中で、唯一温もりを持っていたのは彼女だったことだけはわかるんだ。もうそれしか、わからないんだ。埃まみれのフォトフレームを抱きしめた。そして、彼女が出て行った夜以来、久しぶりに泣いた。懐かしむことも、嘆くこともなかったのに、嗚咽と共に零れた。

「・・・董。」

僕の小さな囁きは廃棄物となったダッチワイフにしか聞こえない。戻ることのないあの頃、戻ることのない当たり前の日々、フォトフレームに収めることもない思い出たち。

「・・・董。」

呼べど叫べど、夢は覚めない。

（後書き）

最後までお付き合いいただきありがとうございます。

誰が人形だったのか、おわかりいただけでしょうか。

あなたの近くにダッチワイフはいませんか。
もしくは、あなたがなっていないませんか。

大事なものは大事にしないとなくなってしまう。
当たり前ですが。

後書きらしい後書きができなくて申し訳ありませんが、処女作です
のでご勘弁ください。

これを読んでくださった方、私の私情に付き合っていたいてあ
りがとうございます。本当に、心から感謝いたします。

信親

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3281o/>

ダッチワイフ

2010年10月17日19時07分発行